

# 起塔供養の趣旨

—お佛舍利塔を熊本市花岡山に建立する趣意書—

妙法蓮華經如來壽量品第十六に曰く

我此土は安穩にして 天人常に充滿せり

園林諸の堂閣 種種の宝を以て莊嚴し

宝樹華果多くして 衆生の遊樂する所なり

諸天天鼓を擊て 常に衆の伎樂を作し

曼陀羅華を雨らして 佛及び大衆に散ず

已上

此十句の經文には、諸佛菩薩の住み給ふ所の、佛國淨土の模様を説き顯はされました。佛國淨土の特質は安穩なることを第一とします、天地に天変地天の怪異が無く、社会に戰鬪飢饉、疫病の恐怖が無く、一切の科學芸術は皆咸く安穩快樂の資材となります。人間の住む所の國土を穢土と申ます、諸の憂患、恐怖、苦惱が際限も無く人類の生命を脅かし続けて居ります。人は恐怖の嵐に戦き、苦惱の波に沈み、憂患の煙に包まる、につけて、恐怖無き國土、苦惱無き生活、憂患なき社會を想像し欲求し渴仰して已むことはざるものであります、此の切実なる人生問題に応へて宗教が起りました。宗教は淨土に必要なもので無くして、

却て穢土に必要なものであります、宗教は安穩なる人よりは寧ろ苦惱の人々に必要であります、或は西方に苦惱無き世界を指す者もあり、或は天上に不滅の生命を指す者もあります。

今此法華經には、大火に焼き尽さる、衆生の住む所の穢土と、如來の住ませ給ふ所の安穩快樂の淨土とは、國土の本質に本来淨穢の差別を認めませぬ、如來が住み給へば、其國土が宛ら淨土となり衆生が住めば、其國土が宛ら穢土となる、淨土と云ひ穢土と云ふも、畢竟住む人の心の清淨と穢惡とに由て現はる、相違であると説かれています、經文には「衆生劫尽きて 大火に焼かる」と見る時も 我此土は安穩にして」と説き又十句の淨土の相を説きましたて次下に「我淨土は壞れざるに 而も衆は焼尽きて 憂怖諸の苦惱 是の如き悉く充滿せり」と見ると説かれました。

衆生世間の苦惱憂患の最大なるものは、大火國土を焼き尽すの災難であります、我国も戦争の当時、老幼男女、昼夜の別なく、具に大火の恐怖を嘗めました、其恐怖の原因を住む人の心に求めよと教へられましたのが佛法であります。兵火は終息しましたが、戦争に因て被れる苦惱は何時終息するともわかりませぬ、此國土は永く苦惱憂患の舞台となつて、其舞台の上に國民は滅亡の悲劇を舞はねばなりません、兵火の終息に伴はずして、依然として人を悩ます穢土の業相を見る者、誰か此苦惱の終息救濟の方策を考へ

ずして居られませうか、救濟の方面は多種多様であります、  
救濟に幾多諸般の設備を要するわけであります、併ら穢土  
となるのも、人の心一つの迷ひから起り、淨土となるのも、  
人の心一つの覺りから起ると聞けば、日本國を一切の諸の  
苦惱憂患から解脱せしむる道も、肝要は但だ人の心を教化  
して、善根功德を養はしむる一つであります、さらば人の  
心を平和に清浄に安穩ならしめんが為に、何を為すべきか、  
法華經には是を分明に説てあります。

妙法蓮華經如來壽量品第十六に曰く

衆我が滅度を見て 広く舍利を供養し

咸く皆恋慕を懷いて 而も渴仰の心を生ず

衆生既に信伏し 質直にして意柔軟に

一心に仏を見奉らんと欲して 自ら身命を惜まず

時に我及び衆僧 具に靈鷲山に出づ

如來世尊入滅の後、其如來の真身舍利を以て、七寶莊嚴

の宝塔を建て、供養し、高廣嚴飾ならしむれば、苦惱の衆

生は其帰依所を見ることが出来まして、其救濟の大悲誓願  
を渴仰し、自ら憍慢を離れて、人心必ず質直柔軟になる、  
其時は即ち如來世尊の住ませ給ふ淨土と言ふも外では無い  
と説かれました。今日住み悪き日本國も、本来定まつた穢

土ではありませぬ、明日は住みよき淨土の日本國となるの  
も、住む人の心一つの淨土建立の功德として現はるゝので  
あります。

法華經方便品第二に曰く

若は曠野の中に於ても 土を積んで佛廟を成し

乃至童子の戯れに 沙を聚めて佛塔と為す

是の如きの諸人等 皆已に佛道を成じき

と説かれました。童子の遊戯にも路傍の沙を聚めて佛塔を作れば、それが淨土建立の種子となり、其童子は無上正覚を成就すると言ふ意であります。



花岡山佛舍利塔の御本尊様

妙法蓮華經授記品第六に曰く

諸佛の滅後に 七宝の塔を起て

亦華香を以て 舍利を供養し

其最後身に 佛の智慧を得て

等正覺を成じ 國土清淨ならん

と云々

是は釈尊の四大弟子成佛の授記であります、宝塔を起て、佛舍利を供養することを以て初發心から最後身に至る迄の成佛の唯一の脩行と定められてあります、其他起塔供養の経文を例証することは、枚挙に遑りませぬ。日本の文化建設には、人心教化を以て其第一義と為すべきであります、人心教化は起塔供養を以て最勝と為すべきであります。佛の智慧を得、等正覺を成じ、國土清淨なることを得るも、純ら起塔供養の功德に含まれたものであります。此経文は独り迦旃延の聞く可き教訓ではありませぬ。私は今此等の経文に拠て、花岡山に佛舍利塔を建てんと欲する者であります。

（略）

日本国に佛教伝來の当初、興隆三宝の詔勅、篤敬三宝の憲章が制定せられた時に、推古天皇の法興寺、聖德太子の難波の四天王寺、大和の法隆学問寺等の建立は、何れも皆其塔には佛舍利を奉安し供養したものであります、飛鳥朝、奈良朝の太平文化は爰に発祥致しました。印度の阿育大王は、印度民族五千年の歴史上、空前絶後の大文化帝国を建

設せし大王であります。一代の間に八万四千の塔を建て、佛舍利を祀り、万国に亘て広く舍利を供養した人であります、其遺跡は往々にして今日に伝はつて居ります。

佛舍利を以て、七宝莊嚴の宝塔を立て、供養すれば、天下太平、万民快樂、則ち人の住みよき淨土となることは経文の金言と言ひ、歴史の遺跡と言ひ疑を挿む余地は有りませぬ、古来我国では佛教典經を、鎮護國家の妙典と呼んで居りました、人心の教化は遠く国家の興隆繁榮となります。日本再建の目標として、花岡山に佛舍利塔を建立せんと、発願致す者であります。

南無妙法蓮華經

皇紀二千六百七年（昭和二十二年）

太才  
丁亥  
九月彼岸

日本山妙法寺 日達